翻訳したい古典

「伝承と受容(世界)」班代表　中務　哲郎

7月27日の会議であったか，中谷代表から翻訳委員会の活動をどのようにすべきかという話題が出された折りに，一つ思いつくことがあった。「古典学の再構築」最終年度の今から作品と訳者を選定し翻訳に取りかかることはできないが，せめて，各文明における古典で翻訳すべきもの，改訳すべきものをリストアップして，次の世代(いや，われわれ自身であってもよい)に申し送ってはどうかということである。筆者自身，隣接領域のことは何も知らないので，それぞれの分野でどのようなものが待ち望まれているかを知るのは興味深いことでもあった。何人かの方に問い合わせを発し，お寄せいただいた提案を以下に記す。

(1)　ビザンツ文学（大月康弘報告）

- アンナ・コムネナ『アレクシオス伝』
  Anna Comnena, *Alexiad*：アレクシオス1世コムネノス（在位1081－1118年）の事績について，娘アンナが書き記した記述。第1回十字軍到来の事情などを伝えて貴重。
- ミカエル・プセロス『年代記』
  Michael Psellos：11世紀半ばに活躍した政治家・文人の筆になる歴史。976－1078年の諸皇帝の事績について記す。
- テオファネス『年代記』
  Theophanes, *Chronographia*：8世紀末から9世紀初に書かれた年代記。ユスティニアヌス期以後，7世紀事情に関する第1級の史料。
- プロコピウス『秘史』
  Procopius, *Anecdota*：6世紀ユスティニアヌス帝期の作品。『戦史』等で知られる著者が，ユスティニアヌス帝と帝妃テオドラについてシニカルに記している作品。
- ニケタス・コニアテス『歴史』
  Niketas Choniates, *Historia*：12－13世紀の歴史記述。第4回十字軍到来の事情などを記して重要。
- ヨハネス・スキュリッツェス『歴史梗概』
  Joannes Skylitzes, Synopsis Historion：1040年以後生まれで12世紀にかけて活躍した国家高官による歴史記述。テオファネス『年代記』の後を受けるとして811－1057年以後の帝国内外の事情について伝える。

(2)　西洋古典分野（中務哲郎報告）

F. Jacoby, *Die Fragmente der griechischen Historiker* は検討に値する，が難物。西洋古典では翻訳事業があちこちで進行中ゆえ，あえて中世の作品を挙げる。

- *Digenes Akritas*　12世紀：ギリシアとアラブの両方の血を引く英雄を主人公とするビザンツ期の叙事詩。キリスト教とイスラム教の対立をテーマとするところは，「アラビアンナイト」やアリオスト『オルランド狂乱』にも類想の物語が見えて興味深い。
- Eustathios Makrembolites, *Hysmine and Hysminias*：13世紀末。中世ギリシア唯一の散文によるロマンス。古代小説アキレウス・タティオス『レウキッペとクレイトポン』の影響下に書かれたとされ，Hysmineは古代ギリシアのイスメネが中世フランスを経てギリシアに逆輸入された名前という。
- Photios, *Bibliotheke*：9世紀，コンスタンチノープルの総主教にして大学者。神学，歴史，文学，哲学，科学等，ポティオスが読んだ書物の要約もしくは引用からなる280章，Bude版で9冊。今日失われた書物についての貴重な情報源。

(3)　インド学（中谷英明報告）

インド学分野では日本人研究者が欧文翻訳を作成することが多いこともあり，邦訳は極めて不十分。読んで理解できないものはreadable　なものに改訳し，部分訳は完訳にすることが課題である。「マハーバーラタ」「ラーマーヤナ」「パーニニ文法」「プラーフマナ」

「シュラウタスートラ」「プラーナ類」「マハーヴァストゥ」　戯曲や詩華集の数々。

（4）　翻訳に値するペルシア文学

（イスラム以降のイランの文学）
（大阪外国語大学 奥西峻介氏報告）

- 伝オマル・ハイヤーム『ノウルーズ・ナーメ（新年の書）』：天文学者であり，数学者であり，『ルバイヤート（四行詩）』の作者として有名なハイヤーム（1040頃～1123頃）の作と伝えられる説話集。きわめて古い語法が見られ，おそらく，イスラム化以前の中世ペルシア語（パフラヴィー語）によって　成立したテキストのペルシア語版と思われる。内容に古い伝承文化を伝えるところもあり，ペルシアの文化，文学，言語を識る上で貴重な文献である。
- ナースィル・ホスロー『サファル・ナーメ（旅の書）』：布教家・詩人としても有名なホスロー（1003－88）が1045年から7年間に亘って，ペル　シア，シリア，パレスティナ，アラビア，エジプトなどを旅した日記ないし旅行記。当時の政治，社会状況を知るために重要な資料。
- マルズバーン・b・ロスタム『マルズバーン・ナーメ（マルズバーンの書）』：10世紀の末にカスピ海南岸のタバリースターンの古代語で書かれたとされる寓話集。ただし，そのペルシア語訳（13世紀）しか伝存しない。『イソップ寓話集』，ラ・フォンティーヌ『寓話』，『カリーナとディムナ』などと並び称される。

（5）　トルコ語文献（濱田正美報告）

トルコ語の古典的作品で，現在までに日本語訳が存在するものは，わずかに間野先生の『バーブル・ナーマ』のみという状況です。

《オスマン・トルコ語》

- ユヌス・エムレ『詩集』：13～14世紀のアナトリアの神秘主義者。その平易な詩は，アナトリアの民衆的スーフィズムを知る上で，最良の材料。
- トゥルスン・ベイ『征服者メフメト二世伝』：オスマンの年代記は数多いが，15世紀末に書かれたこの書は，比較的コンパクトでかつオスマン語美文の一典型。史料としても第一級。
- ムスタファ・アーリー『スルターンたちへの助言』：16世紀最大の文筆家による政治論。これも典型的美文による作品。英訳あり。

《チャガタイ・トルコ語》

- ムッラー・ムーサー・サイラーミー『平安の歴史』：20世紀初頭に東トルキスタンで書かれた歴史書。この地域における著作として最も価値あるもの。

（6）　アラビア語古典文献

（国立民族学博物館 西尾哲夫氏報告）

アラビア語の古典といわれる文献はそれこそ　中国や西洋古典と同じ位あり，おまけに日本語訳はほとんどないが，思いつくまま順不同に記せば，

- イブン・ティクタカー「アルファフリー」：アラブの資時通鑑ともよばれる。
- 「マフディー版アラビアンナイト」：14世紀の原本にもっとも近い千一夜の校訂本。
- ジャーヒズ「動物の書」「けちんぼ物語」
- マスウーディー「黄金の牧場」：博物的歴史
- 「ムアッラカート詩集」：アラブ詩の原点
- イブン・ハッリカーン「名士過去帳」：代表的人物事典
- マイダーニー「ことわざ集成」
- タバリーの歴史
- イブン・ヒシャーム「預言者伝」：代表的ムハンマド伝
- イドリーシーの地理書
- カズウィーニーの博物誌
- ハリーリー「マカーマート」：アラブ散文文学の傑作